

2 降りや雨 解説

今物語〈第七〉※『今物語』和歌を配した話が多く、歌物語的性格を持つ。

本文の展開

大納言が思いをかけていた女房との仲がじっくりいかず、一計を案じた。

←しばらくして

大納言は計画どおりに口実をもうけて帰ろうとした。

←すると

芝居を見抜いた女房は折からの雨にことよせ、

大納言を引き止める歌をよんだ。

現代語訳「雨よ、宮中に出仕する道〔雲の通り道〕が見

えなくなるまで降り。〔そうすれば〕心がうわの空で落ち

着かない人がとどまってくれるか(思うから)。

←結局

大納言は女房のもとに泊まり、後々まで絶えることなく女房を訪れた。

←この話について

後徳大寺左大臣実定卿のことだとかいう。

P8下段 必須古語

A ウ

「こち」は「骨」と書き、作法の意。形容詞「骨無し」は「無礼だ・ぶしつけだ」「無風流だ・無粋だ」の意を表し、形容動詞「骨無げなり」は、そのような感じであるさま。男女の逢瀬あひせを妨げるぶしつけな感じと読み取ろう。

B イ

「やがて」は、女房が大納言の意をくんで、「すぐに・即座に」当意即妙の歌をよんだという文脈。

P9下段 文法

1 エ

「にて候ふ」は、「なり」の丁寧表現で、「候ふ」は取り除いても意味が通じるので補助動詞。「に」は断定の助動詞「なり」の連用形、「て」は接続助詞。

2 ア

③・④は「お忘れではないか」「人がとどまってくれるか」の意味で、疑問を表す係助詞だ。⑤は雨に「降りよ」と呼びかけているから、間投助詞と判断できるだろう。⑥は「とかや」が慣用的表現で、文末にあって「…とかいうことである」の意を表す。「か」が引用の格助詞、「か」が疑問の係助詞、「や」が詠嘆の間投助詞で、下に「いふ」などが省略されている。

問一 イ

隨身と示し合わせたことを女房に知られないように外へ出たと考える。「あからさま」は「ついちよつと」の意。

問二

② 大納言

前にある対になる語「立ち出でて」「内へ入りぬ」は同じ人物の行動だと考えられるから、正解は大納言。

⑤ 女房

歌に続けて「うち出でたりける」とあるので、「(歌を)ちよつと口ずさんだ」という意味。歌をよんだ女房が主語。

問三 ア

「さること」の内容は、大納言が隨身と示し合わせ、口裏合わせをした、女の元から立ち去る口実にあたる。

6行目〔大納言の命令〕

「今しばしありて、『まことや、今宵は内裏の番にて候ふものを。もしおぼしめし忘れてや。』と、おとなへ。」

現代語訳「もう少ししたら『そうそう、今晩は宮中での宿直

でしたのに。もしやおわすれになっているのでは』と声を立てよ。」

問四 ウ

大納言が帰ろうとする様子を見て「心得」たのだから、女房は大納言が隨身と示し合わせてその口実をもうけて帰ろうとしていると、真相を見抜いたと読み取る。

問五 一 雲 二 そら 三 雨

↓ **本文の展開**、**現代語訳**参照

問六 即座に和歌で大納言を引き止めた女房の優雅さに心引かれたから。

女房は、大納言の芝居を見抜き、すぐさま折からの雨に託した歌をよんで、大納言を引き止めている。その優雅さに引かれて離れかけた心が変わるといふ、歌徳説話の典型的なパターンに読み慣れるようにしよう。

主題の把握

ウ

「いとやさしくこそ」は「たいそう優雅なことであるよ」という意味。出て行くこうとする男心を、折からの雨を詠んだ歌一首で、のちのちまでも男の愛をつなぎとめたという歌の効用から、ウが正解。

書き下し文

顔觸は斉人なり。宣王之を見る。王曰はく、「觸前め。」と。觸も亦曰はく、「王前め。」と。宣王説はず。左右曰はく、「王は人君なり。觸は人臣なり。王曰はく、『觸前め。』と、觸も亦曰はく、『王前め。』と。可なるか。」と。觸対へて曰はく、「夫れ觸の前むは、勢を慕ふが為なり。王の前むは、土に趨くが為なり。觸をして勢を慕ふと為さしむるよりは、王をして土に趨くと為さしむるに如かず。」と。王忿然として色を作して曰はく、「王者貴きか、土貴きか。」と。対へて曰はく、「土貴きのみ。王者貴からず。」と。王曰はく、「説有るか。」と。曰はく、「有り。昔者、秦斉を攻む。令して曰はく、『敢へて柳下季の壘を去ること五十歩にして樵採する者有らば、死して赦さず。』と。令して曰はく、『能く斉王の頭を得る者有らば、万戸侯に封じ、金千鎰を賜はん。』と。是れに由りて之を觀るに、生ける王の頭は、曾ち死せる士の壘に若かざるなり。」と。

本文の鑑賞

周王朝が衰えた春秋時代のあとをうけた戦国時代は、群雄割拠の、まさに弱肉強食の時代だった。このような時代において各国の主君は自国を守るため、またあわよくば領土を拡大するために競って天下の賢士を集め、その力を借りようとした。

本文に登場する斉の宣王はその努力を少々怠っていたのだろう。そのことを心配した臣下の顔觸は、「計を案じて宣王を怒らせ、それに乗じて王を諫めようとした。あえて王に対して不遜な(偉そうな)態度をとる」ことで問答のきっかけを作り、賢士を大切にすることの重要性を訴えたのだ。秦王のエピソードは、王が賢士を大切にしたこと具体例としてあげられている。

※諫める…目上の人に対して、欠点などを改めるよう注意すること。

必須語彙

- 1 ウ 2 ア

1 「忿然作色」とは、怒る、腹を立てる状態をいう語。また、王に対して顔觸が不遜な態度をとっているという文脈からも、王は腹を立てているのだろうと、意味を推測できる。

2 「封」には、①「ふう」、②「ほう」という二つの読みがあり、①は「物を中に封じ込める」、②は「領土を与える」という意味。「万戸侯」は土地の領主の意味で、本文中の「封」は②の意味で使われている。選択肢はそれぞれ、アは「ほうけん」と読み、②の意味。イは「ふうさ」、ウは「ふうとう」、エは「かんふう」と読み、①の意味。

訓読

- 1 イ

ア 「日月逝きて、歳 我に与せず」。 イ 「礼は其の奢らんよりは、寧ろ儉なれ」。

ウ 「豎子 与に謀るに足らず」。 エ 「孔子下りて、之と言はんと欲す」。

- 2 エ

前文にある「与使觸為慕勢」とあわせて、「ふよ(与)りは、ゝに如かず」という比較・選択の句形だ。「不如」を「ごとくす」と読んでいるア・ウは不適切。イは、使役の助字「使」を「使ひする」と動詞として読んでいたので誤り。

問一 可乎

※書き下し文を参考に、問一以外の「曰」の内容も、「」（かぎかっこ）をつけて確認してみよう。

問二 ア

・ 觸前、**為**慕勢。 觸が「前む」のは、「慕勢」のため。(觸の前むは、勢を慕ふが**為**なり。)
 ・ 王前、**為**趨士。 王が「前む」のは、「趨士」のため。(王の前むは、士に趨くが**為**なり。)
 「慕勢」の「勢」とは、権勢のこと、「趨士」の「士」とは賢士のことだ。つまり、觸は、自分が前へ進んで王へ近づくのは権勢に近づくための行為だが、王が前へ進むのは、「賢士」(国の利益となりうる立派な人物)に近づくためだと述べている。だから、王が士に「前メ」と命じるより、王自身が前に進み出るほうが優れた行為だというわけだ。

問三 イ

秦が斉を攻めたとき、秦王はまず柳下季という賢士の墓を荒らした者は極刑にするという令を下した。そして齊王の頭を得た者には褒美を与えるという令を下した。これらをふまえて觸は「生王之頭、曾不_レ若_二死士之壟_一也(生きている王の頭は、すなわち死んだ士の墓には及ばない)」、つまり**生きている王の頭より死んだ士の墓のほうが大切にされている**と述べている。これが、「王者不_レ貴」の理由だ。

問四 敢去柳下季壟五十步而樵採者(13字)

問五 有能な士を迎えることが、王にとって最も大切だということ。(28字)

別解 王が有能な士に自分から近づいていこうとすることの大切さ。(28字)

觸は王に「前メ」と言った。

↓ **王自身が賢士を重んじて自ら近づこうとする(迎える)態度の大切さ。**

秦が斉を攻めた時の話をした。

↓ **王にとって(有能な)士とは何よりも重んずべき大切な存在だということ。**

つまり、觸は、「賢士を重んじる」と「自ら賢士に近づくこと」が大切だということ
 を王に教えようとしているのだ。

主題の把握

ア